
Hybrid

(' ・ ω ・ `)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hybrid

【Nコード】

N5752L

【作者名】

(・ω・)

【あらすじ】

周囲より逸脱した存在は拒絶される。

そうやって浮いた存在であった主人公には居場所などなく。

自ら逃避で作ったタイムマシン……しかし誤作動……

何の偶然かそのまま主人公は異世界へと召喚され、

獣人や魔族などが存在する現実ではありえない世界へ……

しかし異世界でさえも利用され、拒絶され……

そんな中、主人公は自分の居場所を探し続ける

Unizon 00:プロローグ

「この戦いが終われば平和が訪れる！
最後の戦いだ！此処が正念場だぞ！」

” うおおおおおおお！！！！！！”

先陣を切る銀色の狼獣人からの勝ち鬨の声が挙がるとともに
地の底から沸き上がる様な怒声が周囲の味方の戦陣から鳴り響いた
弓を振り上げる者、剣を掲げる者、己の拳を突き出す者
各々、自らの武器を取って一丸となり士気が最大限に高まり
目の前の軍勢へと全軍が突撃していった

「頭！報告いたします！」

突如として音もなく銀狼人の隣へ黒豹人が現れて跪いた
全軍の進軍を確認した頭と呼ばれた銀狼は物憂げに返事をした

「何だ、陰影？」

「はっ！それが良い知らせと悪い知らせがございました
良い知らせと言うのはこのままだと後半日程度で敵は陥落するかと」

その吉報を聞いた銀狼は喜ぶでもなく鼻を鳴らすと陰影をみた
油断は勝ちを臆気なものにする……、
それは戦場での常識、誰もが重々承知していることだ

「それで、凶報と言うのはなんだ？」

「はっ！それが、禁術試行の気配を感じまして
敵の魔族の奴ら、時空間に干渉するほどの大きな召還術を使うよ
うです」

「……そうか」

禁術とは、威力、代償、人道的に問題があるもの
それらを見極めた結果使っては行けない術を総称して禁術と呼ぶ
今回の召還術は代償と人道的に問題がある為の禁術指定だ
代償は人柱、言い換えれば生け贄だ

人の命を遣い呼び寄せる上に呼び寄せた相手を問答無用で使役する

「奴らめ、負けるなら潔く負ければ良いものを……」

俺が出る……、陰影、お前と……どうせ其処で聞いているのだろ
う？百牙」

するとテントの影から虎の獣人が現れる……

ただ普通と違う所があるとすればその者が白虎だった所だけだ

「相変わらず勘は良いんだな、絶……何時から気づいていた？」

「戦場では頭や、大将等敬称を付けろと言っているだろう！」

「ははは、別に良いじゃねえか、俺とお前の仲なんだしょ」

そう言う百牙を呆れた様に見て絶は溜息をついた

「まあいい、お前の事だ。常に近くにいるとは思っていたがな……」

百牙はフンと鼻を鳴らすと自分の武器である両刃刀を背に担ぎ不敵な笑みを浮かべる
それを肩をすくめて絶は見据えると自分の脇差と刀に触れ、敵陣へと走り出した。

U n i z o n 0 1 : : B l a c k O u t

俺の意識が急速に薄れていく最中俺は必死に自我を保つ様に自分自身を思い出している

暫くで良い……俺の思考を読んでいる奴……俺自身の事を聞いて欲しい

勤勉、努力、鍛練、これらは確かに意味があるだろう……
しかしながら、俺はそれらを一蹴に伏すような……

俗に言う天才という奴だ……

別にこれと言って何が凄いわけでもなく記憶力が良いのだ
覚えがよいとそう言うレベルじゃなく……

一字一句忘れることができない絶対記憶能力

その気が狂いそうな情報量に潰されないために

必然的に情報の取捨選択……即ち応用力が身についた

それを俗称で言うならば俺の記憶している限り天才以外の言葉が見
あたらない

俺は知っている知識をそれが必要な場所で使う

普通の人がどうかは知らないが周りの奴と同じように

俺は幼い頃からそうやって過ごしてきた……

しかしながら子供というものは人との違いに敏感で

如何せん、集団で排他的になる以外の行動選択が無くなるのだろう

イジメという奴だ

覚えている知識も覚束無いような子供が

無視したり物を隠す等、陰湿なことをする筈もなく

直接的に集団で暴行を加えたりするわけだ……
陰湿的になられた方が幾億倍マシなことか……

それはかなり時間がかかったが格闘家の父へと伝わった
そこから俺は様々な武術を学んでいた……

止せばいいのに……俺は、

古武術、柔術、剣術、総合格闘技、戦場格闘技
ありとあらゆる武術を学んでしまった……

身体は成長期とあり父が鍛える事で強くなった
型など、一度で覚えてしまい

現実の動きなど俺の思考速度に遙かに劣る

唯一足りないものといえば経験だがそれは些細なもの
あつという間に俺は一縷の隙もない化け物へと相成った

そんな俺も今日で二十歳

母はもう既に他界し、父からは化け物扱いされ縁を切った

……えっ？何故縁を切ったか？格闘家って言うのは皮肉なもので強
さを追い求める

……が、しかしながら自分より強者は許せないもの
しかも、それが今まで自分より弱かった者なら尚更だ

俺が15歳の時に父さんから挑まれた試合……所謂、真剣勝負と言
うものだ

俺は父さんの眼にハッキリとした闘志が刻まれているのを見て断れ
なかった

結果と言え言わずともがな、一撃も貰わずに俺の圧勝と言うところ
ろで

実のところ最初は本当に手加減していたのだが、父さんはそれを見
破り

俺は仕方なくに本気を出したただけだ……本当に……仕方なく……

その後、俺は家を出た。自分の知識と能力を使えば生活など造作もないこと

バイトとギャンブルで金を作り、作った金を元手に18歳にて俺は会社を興した。

電子部品からソフトウェア、ハードウェアなど様々な物を扱う会社だ。

基本的に大手企業へと取り引きするデベロッパーだが

わずか二年で会社も大規模へと成長した

元々経営ではなく作るのが好きな俺はCEOと言う立場で指示しつつ技術開発と会社運営を両立していた……

俺はその筈であったが……長年、夢であったことがあり

俺の開発したい物……いや、するべき物か？……それはタイムマシンなんだ？、空想上の産物だと？……そんな事はない……

反重力に反重力をぶつけると時間が歪むその歪曲を制御する事によって

時間航行を可能とするのだ……反重力自体が有り得ないだと？

早々に否定するのは自分の常識を壊されたくないからだな？

何かを生み出すに当たった禁句は”不可能”……無理だと決めつけること

人間とは限界を自分で作っているのだから強い願いが夢を可能とする

……話がそれだが、物体とは微弱ながら重力を持っている物だ

質量が増えればそれに比例して重力も大きくなる

そもそも物質とは電子と陽子で構成されており

これらの数で質量が決まると言っても過言でない

これらを操作出来さえすれば重力のベクトルをも操作可能というわけだ

そして俺は重力制御装置を完成させ、それを二機合わせ出来たものがそれが擬似タイムマシンというわけだ……

それが、先ほどの話……私は過去を変えたいが為、それを起動した
しかしながら俺の計算には間違いがあったのだ

反重力と反重力を重ね時間移動できる原理は空間を歪め

物質をタキオンの速度で光速を越えたならば時間と飛べるはず

その筈であったのだが……

俺は反重力を操作するとは言え

ただ単純に力場を発生させただけで

結果的に発生したのはマイクロブラックホール

もう少し……力場のベクトルを考えるべきだった

云わずともがな……俺は超重力の波に巻き込まれてしまった。

その圧倒的な重力に俺の身体は圧砕され苦痛も無く一瞬で消える筈

……俺の頭は一瞬でその答えを弾き出し避ける事の出来ない物に

俺は自ら突っ込んだのだが、何故か俺はまだ生きている……

周囲は黒に染まってはいるが吸い込まれた数多の物が俺の周囲へ浮
いている

……幾らか時が経ち、もう既に時間の感覚も狂ってはいるが恐らく
数時間だろう

俺は突如急激な眠気へと襲われ、自分の名前を思い出せない事が急
激な違和感としてまず現れた。

そして現在……俺は今まで思い出した事、必要最低限に復唱し思い
出している……

徐々に記憶は欠けては逝っているものの、欠けた先から俺の能力で
上書きしているのだから

あれから……どれくらいの時が経過しただろうか？

数日、数ヶ月、莫大な時間を費やした気がするが、恐らくそれは俺の錯覚だろう……

ようやくの事で記憶の欠如が止まった……、今まで培った記憶の大半が失われてしまったが、

自我を保つことが出来ただけ、まだ良しとしよう……不服ではあるが……

ブラックホールとは物質だけではなく非物質までをも吸い込むものなのか……？

俺がそう思案した時、周囲で動きがあった。俺を取り巻いていた物々が一点へと流れていく

どうやら俗説だと思っていたがそうでもないらしい……ホワイトホールが目の前へとあった。

入り口があれば出口があるのが世の常……出口が何処なのかは知らないが……

俺が生存していけるような世界である事を……俺は柄にも無く居もしない神へと祈りたくなった。

そして世界は光で白へと包まれる

Unizon 02..禁忌を止めるべく…

「雑魚に用はねえんだよ！おらあ！！！」

「隠密行動と何度言えば……目立ち過ぎだ筋肉馬鹿」

絶をはじめとする3人は無事に魔族の城へと侵入できた。

……が、侵入して間もなく見回りに見つかってしまい

百牙が派手に戦って目立ち、瞬時に囲まれてしまったと言うわけだ

「五月蠅え！見つかったもんはしゃあねえだろ！」

「まあ、百牙らしいと言えば百牙らしいな」

「かしらあ……そんな事言ってる場合じゃないですよ……」

そう言いながら陰影は迫ってくる剣戟を短刀で捌き一刀に敵を伏す敵陣の真っ只中で間の抜けたような会話をしているが、中々如何して強いものだろうか。

「そうだな……時間が無い……百牙！ここはお前に任せる！」

「おうよ！先に行って待ってろ、絶！」

「頭と呼べと……まあ良い、陰影」

「ハッ！陰陽術”虚空”」

絶が声をかけると直ぐ様、傍へ陰影が跪く。

それに絶が視線を送る。すると陰影は頷き印を切ると地へと手を当てた。

その瞬間、地へと当てた手を基点に周囲を渦巻く空気を質が変わり二人の気配と姿が揺らいで消えた。

行き成り二人が消えた事によりたじろぐ魔族へ百牙が地面へ武器を叩きつける。

「おい！何処向いてやがる、お前らの相手は俺だろうが！」

一瞬呆けていた魔族達だが次の瞬間、怒声を上げ百牙へ一斉に飛び掛る。

百牙はそれを見て口元に笑みを浮べると叩き伏せるべく武器を構えた。

足音もたてずに無言のまま目的の場所へと廊下を疾走する

実を言えば魔力感知はあまり得意ではない二人だが

禁術使用による莫大な魔力波は露骨にそれを伝えていた

魔城の最上階へと全力で駆け上がっていき目的の扉を蹴破った

魔方陣へ向う者とそれを守る様に立ち塞がる者

絶達が来る事は、ある程度予測していたようで物憂げに溜息をつきながら

魔方陣へ向う者が直ぐ背後の配下へと命じる。

「予想よりも早いな……ライノ、後数分時間稼げ」

「Yes, my lord」

命じられると肩幅へと足を開いて不動の姿勢を保っていた配下の魔族が等身大の大杖を侵入者へと向けた。

向けられた殺気に弾かれた様に絶と陰影は別々の方へと跳躍した。次の瞬間には二人がいた場所へ特大級の焰玉が叩き付けられた……。

「中級呪術詠唱破棄かよ…」

「頭！気を抜かないでください！」

「陰影！」「ハッ！」

その一言により二人はアイコンタクトを交わすと加速して両側から切りかかる。

しかし、ライノと呼ばれた護衛はマントを翻し杖の両端を構えると仕込み双剣で受け止めた。

魔術師だと思っていた者が剣術を使い受け止めた事に驚きその好きに二人は弾き飛ばされた。

「私は此処を任された……」

ならば命をかけて死守するのみ、気安く近づくな！」

「おん……」

「……な、だと……」

二人を驚かせた理由はもう一つある。護衛である筈の戦士が女であった事だ。

二人がそれを口に出した時、ライノは怒りを露にして二人へと双剣

で切りかかる

「女で何が悪い！戦うのに男女の区別など必要ない！

この私にそんな言葉を吐いた事を後悔しながら死んで逝け！」

突如、絶の姿が揺らいで消えると、ライノの延髄へミネウチを叩き込む

哀れみの視線をおくりながら切り捨てて表情を引き締めると魔方阵の方を睨んだ。

「……迷うわけには行かない、負けられないんだ
すまないが、私怨は別の所で晴らしてくれ」

「なっ……そんな……」

屈辱そうな顔をしながら崩れ落ちるライノを見て自分の甘さを苦笑する絶……

しかし、それも眼の前の敵を見れば直ぐに現実へと引き戻される……

「貴様は負戦だとは言え善戦した

それ故悪いようにはしないと思ったのだが禁術使用とは……

直ぐ様その術式を解除して布陣を解くが良い！魔王レグナス！」

その言葉を掛けられたレグナスは不敵な笑みを浮べて忍び笑いをもらす

絶は魔王へと剣の切っ先を向けて語気を荒げて言い放つ

「何が可笑しい！」

「まるで君たちは私を追い詰めたようではないか……」

「危ない！頭！」

傍観していた陰影が飛んできた雷撃を身を挺する

絶はそれを見ている事しか出来ず雷撃が当たり陰影が倒れるまで
まるで何か他人の視点で見ているような感覚に陥る

飛んできた方向を見るとライノがふらつきながらも立ち上がり
杖先を此方へと向けて呪文を唱えて放っていた。

「油断したな、獣王ゼツ……

しばらく会わない内に甘くなったんじゃないか？」

「……黙れレグナス、……怨むなよ」

剣を腰溜めになるとチキリと鏗鳴りを起こしながら走り出す。

……次の瞬間、ライノの直ぐ隣の壁が吹っ飛び百牙が大剣を構えて
現れた

絶は驚いたが百牙と視線を交わすと百牙は察したように剣の腹でラ
イノを壁へと吹き飛ばした

「あっ！……くう……っ……」

「まだ、終わってなかったのかよ絶

陰影も寝てるし、何、梃子搦ってやがんだ？」

「五月蠅い、だけど助かった」

吹き飛んだライノは小さく呻くと気を失って倒れた。

お互いに絶と百牙は皮肉を言いながらも笑みを交わしレグナスへと
向き直った

するとレグナスは振り返り不敵な笑いが嘲笑に変わった

「ハハハ！一足遅かったな獣王ゼツ！

”我が声の聞こえし者、呼掛けに応じ顕現せん！>ハウリングコール<”」

今まで薄ボンヤリと発光していた魔方陣が一際大きな光を放ち天を貫くような光の柱が立ち上った……。

U n i z o n 03..召喚されし地は

光が収まった頃、魔方陣の中心には何者かが召喚されていた。
姿は魔族と猿人に似ているが翼も角も無いし、どうやら毛も薄いようだ。

だが、その黒い眼に得体の知れぬ物を持っている事は確かな様で一筋に絶を見つめる。

「くっ……間に合わなかったか……」

「ハハハハハ！召喚は成功だ！何やら頼りが無さそうだが、禁忌を犯したのだ。

それなりの働きはしてもらうぞ……さあ、行ってあいつらを倒すのだ……」

絶は歯噛みしながら剣へと手をかけるが一向にそのものが襲ってくる気配が無い。

それ所かチラリとレグナスを見ると溜息をついたようだ……。

「な、何をしている！早く行ってあいつ等をたおさ……ガハッ」

「……………」

レグナスは召喚した者へと何度も呼びかけるが召喚した者に思いつきり殴られ昏倒した……

召喚した者は物憂げにまた溜息をつき何やら一言呟くと絶達へと向き直った。

「あれは……敵なのか？どう思う絶？」

「分かんが、どうやら敵意は無さそうだ……と思っていた
分らないか？あそこに確かにいる、……筈なのに気配を全く感
じない」

その事にやっと気づいたようで百牙はそれを告げた絶を見ると
愛剣へと手をかけて再びその者へと警戒し視線を送った。

「迂闊な行動はするな、百牙」

「……分かってる」

絶の一言でピクリとたじろぐが構えは解かずに召喚者を見据える。
しかし、そいつは俺達を無視するかの如く俺たちの横を通り過ぎる
……

このまま何処かへ行く、そう思いほっとした瞬間気絶した陰影へと
しゃがみこんだ。

「っ！……コイツ！」

「動くな！百牙！敵意は……無い」

空気がピリピリと張り詰め緊張する最中でも召喚者は微動だにしない
すると召喚者は何を思ったのか陰影のその顎へと手をあて……
在ろう事かその拳を振り上げ陰影へと叩き落したのだ。

流石にそれには百牙も我慢できなかったのか弾かれた様に大剣を召
喚者へ振り下ろした。

絶はそれを止める間もなく召喚者は叩き切られる、そう思ったのだ
が、

召喚者は大剣の腹に掌抵を当てて剣閃を逸らすと振り下ろした剣を踏み台にして回し蹴りを百牙へと当てた。

綺麗にそれは顎へと命中し百牙は眼を見開いて倒れると気絶していた……。

しかし、その召還された者は百牙へと近寄り顎の具合を確認している所から悪気は無かったのだろう。

絶は”キンッ”と鏗鳴りさせて納刀すると静かに召喚者へと近づいた。

「俺の名前は絶と言う、言葉は……、分かるか？、分からないか？」

暫くその者は思案していたが、ふと口を開いた。

「——……、俺の名前、言葉……分からない」

「そうか……」

多分理解はしていないとは思うが絶は相槌を打った。

言葉始めの言語は知らない言葉であったが、恐らくそれがこの者の言葉だと絶は納得した。

絶の言葉を拾い読みしている所から、とてつもなく頭が良いのだろう。

「ぐっ、ガハッ、ゲホッゲホッ……か、かしらあ」

「陰影！」

息を吹き返した陰影が苦しげに此方へ声をかけてきた。

すると何時の間にか隣へと召喚者が近づいていて、人差し指を自分と陰影の口元へと当てた。

戸惑った陰影は不安げに絶を見つめて助けを求めてきた。

「か、頭？なんすか？コイツは……」

「先程、召喚されて来た者だ。

それより陰影、喋るな。……だそうだ。傷が深いのだろう？」

すると召喚者はそれを肯定するように頷いた。それで陰影は不満気ながらも口を閉ざした。

絶はジェスチャーで召喚者に伝え伝え陰影とその者と共にレグナスと百牙を連れて城を降りた。

<??? Side>

気がつけば俺は石畳、石の壁、どうやら何処かの建物の中へと出たようだ。

周りを見てみれば、獣の姿だが二足歩行をしている者、人の姿だが角や翼がある者

獣人や悪魔と呼ばれるような姿の者達が俺を見て警戒しているようだ。

行き成り出現すればそうだろうかと、周りを見渡せば地面へと幾何学模様が描かれていて

ここまで現実から離れていれば、これが召喚された物だと気づく……。

だろう。

俺はトントンと軽く触診すると心臓の位置へと拳を振り下ろした。続け様に俺は両手を当てて胸へと押し込む、規則正しくそうしていたが。

突如の殺気に俺はそちらを見ると大剣を振りかざし此方へと振り下ろす虎を見た。

避けてしまえばこの黒表に当たるだろう。後ろの狼は気づいて止めようとしていたみたいだが、

この虎は血が頭に上ってしまっているのか、それに気づかないようだ。

剣を弾くより対処方法が無いが、まず弾く物が手元に無い

この黒豹の武器を使っても良いが受けきれないだろう。

俺は剣閃を逸らすように力に逆らわず剣の腹へと掌抵をぶつけ剣戟を逸らし

この虎を止めるべく顎へと回し蹴りを行い脳震盪を起こさせる……。行動に移した所で何時もより身体の動きが良い事に気がついた。

”しまった”と思った時には既に遅く高威力の回し蹴りが顎に当たってしまった。

俺が慌てて顎の具合を確かめていると刀の鏗鳴りが耳元で聞こえ、そちらを見ると狼の獣人が直ぐ傍まで近づいてきていた。

「――、――……。――？」

不可思議な言語だ。日本語に共通する面が多々あるかと思えば韻を踏むようなリズムがある。

恐らく自らを指して言っている事から自分の名前、そして、問い返す際に同じ単語を使っている。

その事から名前を尋ねたのだろう。そして、後者は言葉を話せるか否か……それを尋ねたのだろう。

あの空間で失われてしまった記憶の一つに俺の名前を含まれていた……悲しいことだが、返す答えが無い。

「言葉か……、＜俺の名前、言葉……分らない＞」

「――……」

”名前”、”言葉”、”一人称”、”肯定”、”否定”、今から単語は覚えていけば良いが今の手元にある単語はこれだけだ。

それでも、相手へと意思が伝わった事が、相手の残念そうな表情と返事に現れているのだろう……。

突如、背後から物音と、気配がし、俺はそちらへと振り返る、どうやら黒豹の獣人が気がついたようだ。

胸が電撃で焼けている……余り喋らせるのはよくないだろう……そう思った俺は咳き込む黒豹へと近づく

「ぐっ、ガハッ、ゲホッゲホッ……、――」

「――！」

恐らくは部下と上司、その関係だろう、先程名乗られた”ゼツ”と言う名とは違う単語で呼ばれている。

敬称、そして、呼び返した単語がこの黒豹の名前……しかしながら気管を傷める行為は感心しない。

俺は未だ尚、疑問を晴らそうと発声しようとする黒豹の口元へと自分の口元と共に指先を当てる。

言葉は伝わらなくてもジェスチャーや動作でなら意思くらいは察することができるだろう。

Union 04: 苦い勝利の味

「貴様らの将は我が内にある！直ぐ様戦いを止めるが良い！！！」

骸が横たわり血臭の漂う戦場で未だ戦い続ける戦士たち

戦場に響き渡る大声に皆一同手を止めて其方へ視線が奪われ

ある者は武器を取り落とし、ある者は歓喜し、ある者は落胆し

暫くの時を置いたが徐々に陣形が退いていき、その内に撤収準備へと映る。

すると初老の白い虎が此方へと慌しく向ってくる。

そして絶の安否を確認すると安堵の溜息をつきながら、諫める様な目を向けて言った。

「絶様、将でありながら敵本陣に乗り込むなど無茶をなされて……百牙がついておりながら止めず仕舞いとは……あの馬鹿息子は何処へ？」

「それが、気絶してしまつてな……すまない、珠窩^{しゅか}」

そこまで言うのと召喚者に担がれた百牙へと視線を移す。

それで初めて気付いたかのように召喚者を見定めるように観察する。

「……、絶様、後で少しお話が御座います故に、

後程に少々お時間を頂戴いたします、それではご苦労様でした」

そう言つてペコリと頭を下げるとその初老の虎は何処かへ去つていった。

それと入れ替わりに黒猫が現れペコリと会釈をするとそのまま頭を下げて書簡を差し出した。

「今回の被害総額と、今後の魔族への方針で御座います。詳しくは本陣にて他の者達と会議を開かれるとよろしいかと存じます」

「そうか、ご苦労。魔族の者達は十分に労ってやれ頭を無くして、無用な混乱を起こすのも忍びない……」

絶は報告へと来た部下へと命じると頭を下げ返事をする黒猫を他所に本陣へと向った。

「絶様！　どう言う事ですか！？」

敵の大將であるレグナスを生かして置くななど！」

「はじめは殺そうとしたのだが……」

あの、召還されて来た者が止めるのでな」

息を荒げて反発する猪獸人を宥めながら答えて周りを見渡す。

会議の最中に場違いだとは思うがこの中でまともに意見を言う気はしない。

そう考えながら絶は顔を顰めて軽く溜息を吐いた。

「そうです、何故あの召喚者を野放しにしているのですか？

絶様の事ですから、何か考えのあったの事だろうと思いますが

それでも、あの者は危険です。不仕付けながらも早急に対処するべきだと考えます」

まだ若い狐の獣人が淡々のした口調で絶に述べる。

絶はそれを苦い表情で見つめながらしばし眼をつぶり思案するとゆっくりと眼を開いてそこにいる全員に尋ねた。

「何故、皆はあの者が犠牲者だとは考えないのか？」

「犠牲者……ですと？」

「そうだ犠牲者だ、禁術において発動した事は紛れもなくレグナスの責任である

……が、しかし、だからと言って責任転嫁をしていて良いのだろうか？」

皆、”よく分からない”と言う表情で絶を見つめて絶はそれに答えるように言葉を続ける。

「大きな眼で見れば我らはその発動を止めることが叶わなかった。この世界の責任である。その上、相手は知識のない魔獣ではない。意思も感情も持った我らと同じ生物だ。自分らの都合のみを考えるお前達はあの者の事を考える資格はない」

絶はそこまで言うのと、”もう用はない”と言わんばかりに席を立ち天幕を出た。

そして、丁度天幕を出ると絶はボソリと呟いた。

「陰影……其処まであの者が心配か？」

すると絶の直ぐ後ろに陰影が跪くように現れた。

「申し訳ございません、頭……
盗み聞きは悪い事だとは思ったのですが、」

「気になったのだろ？」

「いえ、その……はい、そうです」

暫く歩いていたがふと歩みを止めて振り返り陰影を見る。
陰影は恥ずかしそうに視線をそらすと答える

「傷は……もう大丈夫か？陰影」

「はい、お蔭様でもう動けるまでには……」

……あの召喚者は処分されてしまうのでしょうか？」

心配そうに言う陰影へ笑みを投げると絶は陰影を撫でて言う

「大丈夫だ、俺がそんな事はさせないさ」

「頭……ありがとうございます」

その主の言葉に陰影は柄にもなく嬉しそうに礼を呟いた。

Unizon 05: 学ぶとは理不尽な事

陰影と絶が暫く歩いているとその召還者が何処となく虚空を見つめていた。

ブツブツと何か呟いているようで此方のことなど眼中にないようだ。

「……召喚者？何をしているんだ？」

絶はそう尋ねてから、言葉が通じないことに気づき失敗したと思っただが、

召喚者はそれで絶に気づいたようで是つと陰影のほうへ向き直って言った。

「言葉を、探してる」

「言葉？」

ふと疑問に思い周りを見渡すと、どうやらこの召喚者は周囲の会話を観察していたようだ。

それにしても、あれから1時間程しか経っていないのに言葉をここまで把握できる事に

尋常ではない学習能力の高さが伺える。それに気づいた絶へと苦い顔を召喚者はすると

陰影へと心配そうな表情を向けて尋ねた。

「君、陰影……言った？傷、大丈夫？」

「あ、え、もう大丈夫です」

「良かった。まだ、静かにする、良い」

「みたいだぞ、陰影。俺も安静にした方が良いと思う」

「は、はい、では、お暇させて頂きます」

そう言うのと陰影は照れ隠しながら逃げるように自分の天幕へと戻っていった。

片言ながらもここまで言葉を操ることに絶は驚きながらもその者が陰影の心配をした事に警戒をしていた自分が馬鹿らしくなって苦笑した。

「ゼツ、大量の本、見せて欲しい」

「本、か……別にいいだろう、が読めるのか？」

「問題ない、言葉、覚える為」

「そうか、では、こっちだ」

大量の本というが、遠征しているのだから、余り本はないがそれでも、本と言うものは重要で100冊弱はあるはずだ

ゼツはそう考えある一つの天幕へと入った。

其処は絶の天幕なのだが、特に気にする様子もなく椅子へ腰掛けると本を指差して召喚者へと促すように言った。

「其処の本を好きに読んで良い好きなものを持って行け」

「分かった、……ありがとう」

そう礼を言った召喚者を満足そうに見ると珈琲へ手を伸ばし口をつけ……そして、ふと召喚者へと眼をやった瞬間、少し顔を顰めた。

何故なら、俗に言う流し読みなど甘く見えるほど高速で本を片っ端から

本の冒頭から本末尾まで一気に捲り上げ元に戻す。その行為を行っていたのだ。

今一瞬眼を離しただけで2、30冊はもう見たと言わべきなのだろうか？

速読……という技術だが、この世界でそんな物は魔法でしかない……

「召喚者……、本を読めているのか？」

「文字は……分かる様になった」

”なった”だと？では今まで読めなかったものを本の規則性だけで読めるようになったのか。

しかし論点は其処ではなく、それを読めている事実。

この者が召還されてきた危険人物である事を改めて考えさせられる事実だ。

と、考えてるうちに召喚者は大きく息を吐いて天井を見上げた……。どうやら今絶が思案している間に全て読み終わったのだろう……。末恐ろしい者だ

「終わったのか？召喚者……」

「ゼツ、ここにある本は読み終わったが、ちょっと読み足りないな。また今度別の本も機会があれば見せてくれると俺は嬉しい」

「え？ ああ……」

不思議な表情をしている絶へと返事をした……随分と流暢な言葉になった物だ。

指揮に関する本に確か魔族言語関連の辞書もあったはずだが……この調子では魔語学も習得していそうだ

そこまで考えた所でようやく現実へと戻ってきた絶は、辛うじて冷静を保ちながら尋ねた。

「何か……、本から得られるものはあったか？」

「この世界の常識と言語、ある程度の知識を……」

質問したのは良いが返す言葉も無いゼツは返事すらもできずに召喚者を見るのみ

それにはもう慣れているのか軽く溜息をつく絶へと言葉を続ける。

「何時も俺を” 召喚者 ” って呼ぶから何かと思えば呼称か……

実は呼び出される時に記憶がなくなっているんだ……召還の副作用だろうな

もしよければ、俺に名前をつけてくれないか？ 自分で考えるのはどうにも恥ずかしくてな」

「……召喚者……すまない、冷静を装いたかったが、無理だ

名前をつけるのは別に構わないが、今の頭では考え付かない。

すまないが日を改めて名前をつけさせてもらってもかまわないか？」

召喚者は特に気を悪くしたわけでもなく快くそれを受け入れてくれ

た。

そして、天幕を召喚者が出て行った後に机の上に一冊本が置いてあり、

さっき読んでいた本だろうと手に取ると”呪術の禁書目録”

そのタイトルに絶は凍りついた。この本は禁術について書いてある。それを書いてあるのだから、自身を召喚した術も見た筈だ。

事実を隠していた事がある、召喚した者を召喚時に直ぐ様操る事が出切るのは

召喚時に召喚する者の記憶を消して召喚する為……

それを知られてしまった。が、それを知ったところで彼は変わらずに接していた。

彼の懐が深いのか裏があるのか……彼の思惑がわからずに絶は一晩悩むことになった。

Unizon 06..夜風が冷たかっただけ..

「この世界には……、月がないんだな」

満天の星空の下で夜空を見上げながらそう一言呟いた。

一応、危険視される筈の召喚者である自分にもテントを用意してくれたことには

絶に感謝をするべきだろう……、実際、絶は俺へと優しくしてくれる……

この世界には常識では測れないような魔法、呪術、召喚術などが普通に存在している。

空想上のお話だと思っていた事が今俺の身近にある事が、堪らなく俺は嬉しかった。

「少しだけ、レグナスとか言う奴に感謝しなくては……」

そう言葉を漏らして崖の上から眼下の人々を見た。

この世界には竜、魔族、鳥人、獣人等がいるが、只の人間だけは存在しない。

獣人族の中に猿人はいるらしいが、しかし、それだけの事

「……………」

俺は自分の身体をみながら一つ溜息をついた。

俺を召喚する際に魔族を二人生贄に捧げた様だが、

それを除けば、俺の知的好奇心を満たしてくれる何かがあるこの世界へ喚んだ事を恨みはしないだろう……

「一つだけ……記憶を失った事は解せないが……な……」

元々、実験の失敗で失う筈だった命を今更惜しいとは思わないそれに、それ以前に俺の居場所は最初から向こうには無かったのだから

そこまで考えたところで背後に気配を感じて振り返った。

そこには陰影と呼ばれたあの黒豹が此方を心配そうに見て言った。

「召喚者、眠れないのか？」

「ああ……少し、元の世界と勝手が違うんでな」

その答えに小さく”そうか”と呟くと陰影は召喚者の隣へと近づいて同じ様に腰を下ろした。

俺はそれを眼で追いながら胸元に走った焦げた痕を見ていた。

「痕……残ってしまったな」

俺がそう言っていると、何がおかしかったのか陰影は驚いたように俺を見ると笑みを零した。

「傷つく事を恐れては戦えない、君は……戦いを知らないのか……？」

怪訝そうな顔をして陰影はそう尋ねる、しかし俺は意に介さず言った。

「そんな物は無い平和な世界から来たもんでね」

「その割には気配を断つのが上手いみたいだが気のせいかな？」

その問いへ俺は答えを返さずに笑ってはぐらかす。

陰影はそれを不満そうに顔を顰めるが、答えてくれない物を聞いても仕方ないのか

それ以上追求せず陰影は先程俺がそうしていた様に夜空を見上げた。

暫く二人で空を見上げてはいたが、俺がチラリと隣を見ると

陰影もその視線を返す、俺はそれに表情を崩すと尋ねた。

「……触っても良いか？ 獣人なんて者もいなくてね」

そう言った俺を陰影は見ると”どうぞ”と言わんばかりに眼を瞑って身体を差し出した……。

俺はそれに甘えると顔の骨格をなぞって、頭を撫でる。

そこから耳を触ると少しだけ陰影は不快そうな顔をするが特に抵抗するでもないで触り続け、

そのままサラサラとした毛並みを撫でながら胸元の毛羽立った痕へと触れて俺は固まった……。

陰影はそこで眼を開けると俺と眼を合わせ数秒の沈黙の後で口を開いた。

「だから、大丈夫だと言って……」

陰影はそれ以上言葉を続けられなかった。

召喚者がとても寂しそうな顔をしたからだ……。

「それでも、この綺麗な毛並みが失われたのは残念だ」

「そ、そうか……ありがとう……」

陰影は照れくさいのかどう返していいのかわからず、誤魔化す様に

夜空を見上げた。

暫く沈黙が続くが、突如、何を思ったのか召喚者は陰影へと抱きついた……。

「し、召喚者!?! い、一体なにを……」

「俺は……向こうの世界では独りだった。

居場所が欲しかったんだ。絶も陰影も優しく……

叶うなら……俺はずっとこのままでいたい……落ち着くんだった陰影達」と

「召喚者……」

見ると召喚者は陰影の毛皮へと顔を埋めていて見えないが

どうやら泣いているらしく自身の毛がジンワリと濡れていくのを感じる。

声をかけて慰めたかったがそこで相手の名を知らぬ事、知る機会が無くなってしまった事に

陰影は今までに無いほどの齒痒さを覚えた。そして陰影は相手を抱き返す。

同情した訳ではない……、かと言って、義理でもない……

ただ、同じ人として……目の前の小さな者を護りたいと思った……頭、絶様、お許し下さい。ほんの一瞬でも全てを捨てても護りたいと思った事を……

今、私には、これしかしてあげられる事が無い……

この者が危険だ等と排斥するならば、命をかけて抵抗しよう

二人の間を何処か温かい風が吹いた。

そして月明かりさえも頼りないほどに、夜が更け行く……

U n i z o n 0 6 : 夜風が冷たかっただけ… (後書き)

書き溜めた分を排出終了

ここからは、ゆっくり更新して行くからね☆

Unizon 07..新たな名…そして

「それにしても、昨日の今日でよく言葉を覚えることができたものだ」

百牙が半ば感心しながら召喚者を褒める。

昨日の事は結果として陰影を助ける事だった事を聞いてお咎め無しに終わったようだ。

「いや、でも、聞き覚えた物しか知る事はできない
皆に比べると……まだ、完全ではないです……」

寂しそうな顔をした召喚者を陰影は複雑そうな表情で見つめる
それを絶は見ながら軽く溜息について召喚者へと声をかけた。

「昨日の件だが、俺一人で決めるのは忍びなくてな
考えては来たんだが、陰影や百牙にも考えて欲しくて呼んだんだ」

「うん、それで良いよ、俺としてもその方が嬉しいし」

「何のことですか？頭……」

話の内容が全く見えない百牙と陰影は蚊帳の外で、
堪り兼ねて陰影は絶へと話の内容について尋ねる。

陰影の疑問に絶は視線を俺に流す……

どうやら、話して良い物かどうかを判断しかねているようだ。
絶から話すのも何かとおかしい気がしたので自らソレを話す。

「いや、ただ単にゼツに俺の名前を考えて貰っていた……それだけだ別に陰影や百牙にも遅かれ早かれ知られるし、寧ろ知って考えて欲しい」

「……そういう事だ。しかしだな……名前には力が宿る俺たちの命名規則が君の世界と違うかもしれないが良いのか？」

俺はその言葉にコクリとうなずくと既に考えていたのかメモ帳のようなものを取り出した。

それを照れくさそうに絶は「真面目に考えないと失礼だからな」と差し出す。

色々な単語が殴り書きされてはいるが、キチンといくつか候補が拳がっついていて

それに三人で眼を通していると、一つだけ欄外に名前が書いてあり絶がボソリと呟いた。

「……たいと」

「えっ？」

突然発した絶の言葉を聞き逃した訳ではないが其れが意味する所を確認する為にもう一度尋ねる。

「……たいと、と言う名を考え付いた。龍と雲を意味する名前だ龍と言う者はこの国では神聖化されていてな、龍の傍には何時も雲がある。

雲は掴み所が無いが世界にとって大切な物、其れを自在に操る龍の名前を……」

「何で、そんな大層な名前を？」

絶の言葉に疑問を持った召喚者である俺が尋ねる。
絶は一度だけ頸を横に振ると俺を見て言った……。

「わからない……が、俺には召喚されて来た時に見えた召喚者が光を纏っていて、

とても、災厄の禍根だとは思えなくてな……どちらかと言うと偉大な者の感じがした」

「頭、私もそれで良いと思います」

「え、ああ、俺もソレで良いと思うぜ」

陰影が賺さず肯定をすると黙って聞いていた百牙もつられて肯定する。

「そ、うか……ありがと……その名前で良い、名前負けしそうだけど、うれしいよ」

召喚者は照れる様でいて、何処か残念そうな複雑な表情を浮べて礼を言った。

「よし、それじゃこれからは”召喚者”じゃなく、”たいと”だな」

百牙の一言でたいとの複雑そうな表情を見ていた二人が我に還る。召喚者も百牙のテンションに引きずられるかのように笑みを零したので

その場の流れでその事は忘れてしまった。雰囲気流されて……

Unizon 08..竜車に揺られて

「絶様！帰還の手配が済みました」

絶は報告を聞くと雰囲気を入れ替え、
軍を指揮するものとしての風格を露にしつつその者へ命じた。

「分かった、では軍の3分の1は適当に選んでこの地の警護を
残るは帰還するとしよう……、配備の手配は珠窩へ一任する。皆
へ伝えよ」

「はい、その通りに……絶様の車はあちらへご用意してあります、
では」

伝令の者は一度頭を下げると彼方へと走り去って行った。
そこで絶は振り返り表情を崩すと俺の肩へ手を置いた。

「たいと、お前が良ければ一緒に来るか？
召喚されて右も左も分らないのだろう？」

「でも……甘えてばかりは……」

本来ならば有難い申し出なのだが、たいとは渋った……

一つ目は甘えていられないこと、それは自分の墮落を意味する。
二つ目は災禍の禍根である自分を匿わせたくない事。
三つ目は二つ目によってトラブルに巻き込みたくない事。

何れも自分だけではどうしようもできない。

……かと言って、この世界での生き方も分からない。
それがたいとの返事を洩らせている理由であった……。

「そこまで言うなら陰影を助けてくれたその礼と言うことでどうだ？」

「そう！それが良いです！」

絶のその提案に真っ先に陰影が反応した。

あからさまな態度に怪訝そうに百牙は口吻へ皺を寄せる。

確かにこの者への陰影の執着は半端ではないだろう……

しかし、現状では召喚者も納得はしないだろうし存外ソレが良い案のような気もして絶は頷く

「暫くの間だけなら……」

「決まりか、なら来い……竜車を待たせているからな」

「”竜”……車？」

思わずタイトが発した疑問の言葉にこたえるかのように

絶は顎で視線を促した……視線の先にはやや小型の二足歩行の竜が二頭車に繋がれていた。

「アレに乗って行くんだ……召喚者の世にotto、タイトの世界じゃ違うのか？」

百牙が思わず発した名前を訂正しながらそう尋ねる。

機械という概念があるかもわからず、

それ以前に言語もまだ発展途上のタイトは苦笑してはぐらかす

その困った質問に絶が

「記憶障害で覚えていないのだろう追及してやるな」と助け舟を出してくれた事で百牙は納得したようである。百牙を筆頭に皆は竜車に乗り込むこととなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5752/>

Hybrid

2010年11月29日22時01分発行